

アメリカ社会理解の史的原点

—プリマス植民地形成をめぐって—

齋藤 眞

- I はじめに：ICUアメリカ研究読書会と『プリマス植民地について』
 - II 背景：なぜ、分離派ピューリタンは、アメリカ移住を決意したのか
 - III 移住：出資者と移住者との共同事業としてのアメリカ移住計画
 - IV 人員：メイフラワー号上の人たち (Pilgrim Fathers)
 - V 契約：なぜ、「メイフラワー誓約」は結ばれたのか
 - VI 契約：教会契約と政治契約，同質と異質，純粹と妥協，排他と内包
 - VII 比較：なぜ、1607年のジェイムズタウンではないのか
 - VIII 構造：政治参加・政教分離・政軍関係
 - IX 排除：先住民排除による土地獲得，「アメリカ史の原罪」
 - X おわりに
- 注

I はじめに：ICUアメリカ研究読書会と『プリマス植民地について』
今学期は、南北戦争終了から現代にいたるまでのアメリカ史を勉強してまいりました。その点最後には、今日の問題、たとえばアメリカ史における湾岸戦争の意味といったことについてお話しするのが、最終講義らしい

のかもしれませんが。しかし、何分そういう気持ちにはなりませんし、そういった知識も持ち合わせておりません。したがって、仮にそういうことをお話しても、3日後には全く事態が変わっていて、最終講義の修正最終講義をしなくてはならなくなるかもしれません。ということで、本日は、思い切って1991年から一足飛びに370年遡って、1620年のアメリカで起こった出来事について考えたいと思います。

具体的には、メイフラワー号に乗って、いわゆるピルグリム・ファーザーズが今のボストン南方のプリマスに上陸し、そこに植民地を形成したことについてでございます。メイフラワー号というようなことになると、児童物語、あるいはアメリカの建国神話、といったことで、なにか歴史研究の対象としてとり上げることに少しく躊躇を感じせしめることが無きにもあらずです。私もかつてそうでした。それに、メイフラワー号、メイフラワー誓約、プリマス植民地については、すでに言い尽くされ、研究し尽くされている、いまさらにも言うことはないだろう、という気持ちもいたします。ICU 図書館に新刊雑誌コーナーがございます。先日、*New England Quarterly* という研究誌の昨年6月号をめくっておりますら、D. S. ラヴジョイという人の“Plain Englishmen at Plymouth”いうまさにこのプリマスをとり上げた論文がありました。¹¹⁾ その劈頭に「プリマスのピルグリムズについては、言うべきことは、すでにすべて言い尽くされていると思われるであろう。しかしよく知られている資料を読み返してみると、違ったアングルから新しい展望が見つかることもある」という趣旨のことが記してありました。

本日より上げたいのは、プリマスについておそらく一番「よく知られている」資料である *Of Plymouth Plantation, 1620-1647* (『プリマス植民地について』) というウィリアム・ブラッドフォードが書いた手記でございます。ブラッドフォードは、プリマス植民地の形成、維持、発展にあたっての中心的な人物で、その人が1630年頃から書いた手記・記録でございます。その記録が書物としては刊行されず、草稿のまま転々とし、結局

独立戦争の時にどうもイギリス軍がイギリスへ持ち帰ったらしく、それがまたアメリカ人が手に入れ戻した、といった事情があり、書物として刊行されたのは1856年で、それ以後いろんな版が出ております。私も、だいぶ前に一冊購入し、部分的には読みましたが、通読はせず、ツンドクのままになっておりました。ところが、6年前でしたか、今日もいらっしているアメリカ文学の大西直樹先生から「アメリカ研究の読書研究会をやろうじゃないか。ここはリベラルアーツ・カレッジでいろいろな専門の人がいる。しかしその狭い自分の専門を乗り越えて、アメリカ研究ということで一緒に一つのものを読んで勉強しようじゃないか」というお申し出がありまして、私も「それはいい。やりましょう。何をやりましょう？」ということで、結局ブラッドフォードの *Of Plymouth Plantation* を読もう、ということになりました。

その読書研究会では、*Of Plymouth Plantation* (以下、『手記』と略記します)の多くの版の中でも、今日一番定評のある版を使いました。S. E. モリソンというハーヴァードの植民地時代史の教授で、今から40年前の1951年に私もこの先生から習いましたが、その先生が編んだ、非常に注もよくできている版です。²⁾ それを、大西先生をはじめ、今日ここにおいでの小松山さんなど10人くらいで、一章ずつ読んでいくことにしました。丁寧に読んでみますと、今までなんとなく児童物語、建国神話に見えたプリマス植民地の形成について、このブラッドフォードの『手記』の中に、実に興味ぶかい、深く考えるべき記述が多い。あるいは皆さんは、ブラッドフォードが総督など勤め、プリマス植民地の中心だった人ということで、いかにプリマス植民地はすばらしかったか、神の御業がいかにそこで行われたかなど、自画自賛的なことが書かれているのではないかと思われるかもしれませんが。ところが、ブラッドフォードの手記はまことに散文的であり、事実の記録を中心としております。その点、隣のマサチューセッツ植民地を建設したジョン・ウィンスロップの有名な船上の説教、その植民地は「丘の上の町」として世の範たるべきであるという説教、³⁾ 同じくマサチューセッ

ツの有名な牧師コトン・マザーの書いた *Magnaria Christi Americana*, のごとくニューイングランドにおいて、アメリカにおいていかに「キリストの大いなる御業」が行われたか、という栄光の記録⁴⁾とは、その調子が異なります。ブラッドフォードの手記は、むしろ逆であって、いかにそこで多くの悪が行われたか、うまく行かなかったか、失敗があったかということ、いわば「前車の轍を踏むな」という後世への戒め、子孫のための警告として書いております。したがって、いろいろな犯罪が行われたことも、非常に率直に書いてある挫折の記録でもあります。その点、普通の歴史研究の資料として読むことのできる本といえます。この著名な資料にたいし、新しいアングルでいろいろな読み方ができる。今アメリカの歴史学界では、「新しい社会史」、たとえば家庭生活はどうだったのか、どんなものを食べていたのか、婦人の地位はどうだったのか、といった研究が盛んですが、そういうアングルからこの『手記』を読むこともできます。あるいは、後にふれますが、当時は植民地形成も一種の企業でありますから、経済史、あるいは経営史としてすら読むことができるかもしれません。私自身は、どういうアングルから読んだかと申しますと、政治社会形成の一例、しかも、すぐれてアメリカ的な一例として接近したしだいです。あえて「アメリカ社会理解の史的原点」などとおおげさな題をつけた所以です。つまり、「ピルグリム・ファーザーズ」というと、信仰を同じくした信仰共同体がそのままプリマスへ行き、そこに信仰を同じくした人びとの植民地を建設した、というふうに考えられます。しかし、事実はそうでない。後で詳しく申しあげますが、事実は、メイフラワー号に乗っていた102人の半分余りは、いわゆるピューリタンではない人たちです。メイフラワー号に乗っていった人びとは同質的な集団ではなくて、同質と異質とが混じった集団であったわけです。そのこと自体はよく知られています。多くの本も、メイフラワー号に乗っていった人たちはピューリタンだけではなく、ピューリタンでない人もいた、と書いてありますが、私は「もいた」のではなくて、「がいた」ということに強調点を置いて考えたい。そうする

とそこから、なぜいわゆるメイフラワー・コンパクトなるものが結ばれたのか、がより鮮明に理解されてくる。そういう意味で、いわば政治史的観点から『手記』を読んでみてください。

Ⅱ 背景：なぜ、分離派ピューリタンは、アメリカ移住を決意したのかまず、分離派 (Separatists) と呼ばれる、ピルグリムズの中核をなす人びとが、なぜイギリスからオランダへ、そしてオランダからアメリカへ移住を決意したのか、移住せざるをえなかったのか、についてごく簡単にのべておきます。周知のごとく、イギリスにおいてヘンリー8世ないしエリザベス女王の時代に、ローマ教会から分離してイギリス国教会 (Anglican Church) ができた。ところがイギリス国教会は、政治的な理由で成立したもの故、信条ないし儀礼において中途半端なものである。したがって、それをより純粋なものにしよう、という動きが出てくる。そうした人びとがピューリタンと呼ばれた、ということは良くご承知の通りです。ピューリタンというのは、イギリス国教会の中にあって、その中側からそれをピューリファイしようとする。それにたいして、イギリス国教会の中にあってピューリファイしようとしても、それは無理で、もし本当に信仰を守ろうとするならば、国教会から離れて、別に自身の教会を作らなければならないという人たちが出てまいります。それがセパラティスト、分離派といわれる人たち、あるいは当初ロバート・ブラウンという人が中心となっていたことから、ブラウンストとも呼ばれる人たちです。したがって、このセパラティスト、将来メイフラワー号に乗ってプリマスへ行く人びとは、言葉の厳密な意味ではピューリタンではない。しかし、しばしばピューリタンとしてとり扱われていますし、別にすると話が細かくなりますので、私も一応ピューリタンとして、しかし分離派ピューリタンとし、それに対していわゆるピューリタンは非分離派ピューリタンとしておきたいと思います。

分離派は、イギリス全体としてはごく少数ですが、ロンドンにも分離派

の教会があり、ロンドンから北のスクルビーという町でも、今日の主役の一人であるウィリアム・ブルスターを中心に、彼らの信条に合うような牧師を招いて、自分たちのCongregation、集会、教会を作った。教会堂はありませんから、ブルスターの家が教会です。ちなみに、このブルスターという人は、この集団のなかではかなり裕福な人で、ケンブリッジで学んだこともあり、ロンドンで役人として勤めたこともあります。スクルビーは、ロンドンから北方へ行く幹線沿いにあり、そのポスト・マスター（宿駅長と訳されています。いふなれば、宿場の本陣の主人みたいなものと思われます）をやったりしておりました。このブルスターを中心に、ロビンソン (John Robinson) という牧師を招き小さな集会をもっていた。セパラティストは国法違反ですから、そのうち迫害がつよくなってくる。家では集まりが出来ないので林の中や、野原で礼拝をまもったりする。さらには、セパラティストの仲間が牢獄に入る、あるいは死刑に処せられる。これではとても自分たちの信仰を守れない。比較的宗教の自由があったオランダへ行こう、ということになります。密かに船に乗ったところ、とたんに官憲に押さえられてしまった、とか紆余曲折がありますが、1608,9年あたりにオランダへ移って行きます。初めアムステルダム、それからライデンへ行き、そこで自分たちの信仰を、自分たちの礼拝を守ることができたわけです。しかし、ブラッドフォードがオランダに着いた時のことを書いておりますが、「そこは自分たちが育ちそして長い間生活してきた簡素な農村社会 (plain country villages) とはまったく違う。あたかも別の新しい世界へ来たみたいなきがした」と記しています。つまり、彼らは農村の堅実、質素なヨーマンであった。それが、外国の商業都市に来たのですから、非常に戸惑う。何とか印刷工、紡績工など職を探して生活はしますが、やはり自分たちのイギリスにおいて生活してきた堅実な農民としての生活を取り戻したい。それから、これがもっと深刻であったらしいのですが、自分たちの子供はいったいどうなるのか。子供たちは、オランダの子供たちと交わり、自分たちの信仰も、英語も忘れてしま

う。あるいは、良くない遊びをする。中にはオランダの兵隊になろうとする者もでてくる。ということで、将来のことが非常に心配になる。彼らはイギリス人です。これは非常に重要なポイントで、イギリス国教会は否定し、イギリス国教会は離れたけれども、彼らはイギリス人としてのアイデンティティーを持っておりました。したがって、オランダでは、一応宗教の自由はあるにせよ、結局イギリス分離派としての信仰、生活、文化を将来とも保つことが難しくなる。さらに、オランダはご存知のようにかつてはベルギー領でありましたから、ローマ・カトリック教会の勢力が再び強くなったりしては困る。⁶⁾ では、どうしたらよいのか。

Ⅲ 移住：出資者と移住者との共同事業としてのアメリカ移住計画

そこで、オランダを離れ、自分たちだけで生活できるところに、再び移住することを考え、結局アメリカへ行こう、ということになります。そこまではいいのですが、アメリカへ行くといっても資金がいる。それをどうするか。彼らは、イギリスからオランダへ渡り、オランダに家を買ったりということで、すでに財産を消費つくし、手持ちの資金はほとんどない。まずアメリカ移住の許可を得、移住のための出資者を見つけなければなりません。当時のイギリスの植民地事業は、直接的には国家的事業ではなくて私企業、会社あるいはアドベンチャラーズと呼ばれた資本家、出資者が集まって、資金を出し合って、いわばハイ・リスク、ハイ・リターンの冒險的な投機的な事業です。当時、アメリカ関係のそういう会社でいちばん大きかったのが、ヴァージニア会社です。ヴァージニア会社が、国王から広大な土地を貰い、植民地（ヴァージニア植民地）を設立している。その会社と渡りをつけて、そこへ移住し、資金も出来ることならヴァージニア会社から出してもらいたい。ヴァージニア会社（ロンドン）は国王からチャーター、特許状をもらって、アメリカに「北緯34度から41度まで」、当時は西に何があるかわかりませんので「海から海まで」などと大変広大な土地を所有している。その広大な土地を、今度はヴァージニア会社がさらにある特定の集

団に対して「ここを使ってもいい」というペイメント、許可状を出すという仕組みになっています。ライデンの分離派の人びとは、つてをたどって、その許可状は何とかもらえたようです。しかし、ヴァージニア会社は当時財政的にも困難な状況にあり、資金は出してくれない。

そこへ、トマス・ウエストンなる資本家といますか、投機的な出資者が登場し、70人ほどのグループを作り、資金を出してやる、ということになります。その場合、移住者の大人一人は10ポンド、女・子供は5ポンドに相当する株をもつということになっております。中には、ピューリタンの人で少し金のある人は、自分という株の他に20ポンドなら20ポンドを出して持ち株をふやす、というかたちです。実際に移住する人とロンドンで資金だけ出す主な出資者との一種のジョイント・ベンチャーでいこう、ということです。資金のないピューリタンの人たちにとっては、そうせざるを得ないわけです。自分たちに資金があれば、自分たちだけで組織したのでしょうか。そうなると、出資者から見ますと、ライデンの人びと、ピューリタンは確かに信仰が篤い、確かに勤勉かもしれない、しかし、一体この女、子供づれの人たちだけで、あの荒野に新しい植民地を建設できるのだろうか、利潤をちゃんと生み出すような新しい植民地ができるのだろうか、ということをお心配するようになります。そこで、出資者の合理的計算からいえば当然だと思われそうですが、ライデンの人びと以外に、イギリスの中でこの移住事業に加わる人たちを募り、イギリスから何人かの人たちを、アメリカへの移住に参加させます。この人びとはセパラティストではないことはもちろん、ピューリタンでもない、おそらく教会籍的にはイギリス国教会の会員であったと思います。その信仰のほどは分かりませんが、つまり、営利事業、私的企業であるが故に、出資者たちが、ピューリタンではない人たちを、イギリスにおいて募った。ピューリタンの方も、自分たちには資金がない故、出資者に依存せざるを得ず、それを受け入れざるを得なかった。さらに紆余曲折を経て、1620年9月、180トンのメイフラワー号に乗って、分離派ピューリタンは、ようやくアメリカに

向けプリマス港を出発します。

Ⅳ 人員：メイフラワー号上の人たち (Pilgrim Fathers)

プリマスにいらっしやると、今はこのメイフラワー号の実物大の模型が
ございます。私が最初にプリマスへ行った1951年の頃はそんなものはあり
ませんで、非常にさびしい町という感じがいたしました。今はこの船もあ
り、往時の集落の様子が再現されており、かなり観光地的になっておりま
す。さて、180トンの船に、移住者としての乗客と乗組員が乗っております
た。その102名の乗客、移住者の内訳、構成はどうなっていたのか。それを
表にしますと、次のごとくなります。

	saints	strangers	servants	hired hands	合計
男性	17(17)	17(17)	11(4)	3(3)	48(41)
女性	14	9	1		24
未成年	10	14	6		30
合計	41	40	18	3	102

() 内は、メイフラワー誓約書署名者の数。

saints と申しますのは、日本語で訳せば聖徒となります。これは、
ピューリタンたちが自分たちを指して言っている言葉ですが、聖書的用語
で、「忠実なる信者」というくらいの意味です。そういう人たちが、男性が
17名、女性が14名、それから children と書いてあるが、小さな子供という
よりは、まだ一株もらえない未成年者を意味するようです。19歳になると
大人として一株になる。それまでは半株です。したがって、中にはもう17
歳位で結構一人前の働きをするものもいます。ともあれ、移住者全員102
名のうち41名、これがライデンから来たセバラティスツ、信仰を同じくす
る人たちです。それに対して、strangers、よそ者というのはイギリスで参
加した人たちで、ピューリタンからみれば、異質な人びとです。それが、
男性が17名、女性が9名、未成年者が14名、合わせて40名になります。そ

れに, servants, 奉公人ですが, これはピューリタンの方にもいますし, ストレンジャーズの方にもいます。それが18人。最後に, hired hands, 雇人とも訳しますか, 一年契約で雇われた人たちです。水やビールをためたりする樽を作る樽職人, あるいは小舟を動かす水夫とか, そういう人たちを雇った。したがって, これは当然イギリスで雇った, いわばストレンジャーズの人たちです。これが3名。すなわち, これらを総計すると, 奉公人のなかをどう分けるかが, 少々難しいのですが, 102名の内の約半分, おそらく半分以上はピューリタンではない人たち, セパラティストではない人たちであった, ということになります。私としては, この事実を重視したいと思います。なお, 今日では, よそ者をも含めて, 102名全員が, Pilgrim Fathers と呼ばれることが多いようです。⁶⁾

V 契約：なぜ、「メイフラワー誓約」は結ばれたのか

ようやく, Mayflower Compact のことに入ります。2カ月あまりの間, 180トンの小さい船に102人が乗込み, 船員からからかわれ, 邪魔者あつかにされ, ともかくアメリカのケープコッドの沖にたどり着く。皆, ほっとした。これでようやく辛かった長旅を終わって, 上陸できる。ところが, そこで一つ問題が起こります。それは, さっき申しあげたように, ヴァージニア会社の管轄は「北緯41度から」であり, このケープコッドは, ほぼ北緯42度で, ヴァージニア会社の管轄区域の外, つまり彼らと与えられた許可状の範囲外になり, 法的にはそこには上陸できないわけです。そこで, メイフラワー号は再びそこから南下します。ところが, 『手記』によると途中で荒波にあたりして, とっても進めないということで, また引き返してケープコッドに上陸しようとする。このへんのいきさつは非常に複雑で, 調べると興味あるところですよ。ともかく, ここに上陸しよう, となったのが, 1620年の11月です。ご存知の通りニューイングランドの11月は寒く, 荒涼としています。まあ当然のことですが, 「迎える友もなく, 疲れた体を癒し慰めるべき宿もない」と正直にブラッドフォードも書いています。

冬がせまっているうえ、先住民のインディアンもいるかもしれない。そういう状況なのです。そのときに、問題が起きる。『手記』によると、ストレンジャーズの間で、不満・不平の言葉が聞こえ出した、というのです。彼らの言い分によると、自分たちはヴァージニア植民地の中の一定の所に植民地を作るべくイギリスから参加した、ところが今着いたところはその管轄外であり、だれも自分たちを拘束する権利はない。したがって「自分たちは上陸後は、行動の自由 (their own liberty) を持つ。」要するに、別の集団として別行動をとろう、という動きが、よそ者の間に出てきた。これは、その時の状況を考えてみると、想像がつかます。ピューリタンたちには女性・子供が多い。自分たちはいわば働き手としてイギリスで募られた人たちです。したがって、あの荒涼たるところへ上陸したら、自分たちは労働力としてうんと奉仕せざるを得なくなる。どうも割りが合わない。それならば、自分たちだけ別に行動した方が得だ、というように考えたのではないか。これは、ピューリタンたちにとって、プリマス植民地形成の第一歩での重大な危機です。というのは、確かによそ者たちは信仰的には異質集団ですけれど、これから新しい荒野で新しい植民地を作っていく時に、彼らの労働力は大変に必要なものであった。ここで互いに分かれてしまえば、信仰集団としては同質性を保てはするが、集団の生存そのものが危うくなる。

そこで、上陸する前に船室で相談をし、平たく言えば「互いに一緒にやろうじゃないか」と話し合って、一つの集団として行動を共にする約束をし、文書つまり契約書を作って、成人男子41名がサインしたのが、かの有名なメイフラワー誓約です。全文を注(7)に載せておきましたが、大変短いものです。中心は、まず「本証書により、厳粛かつ相互に契約し、神と各自相互の前で、契約により結合して、一つの政治団体 ("a civil Body Politick") を作」ろうということにある。ついで、今後「植民地の一般の福祉のために」随時つくられる法律などにたいし「われわれはすべてこれに当然服従することを誓約する」とあります。そこに署名した41名の名を見

ますと、17世紀初めの話しですから、女性は含まれていない。未成年者もその資格はない。上記の表によれば、成年男子の聖徒、よそ者、雇人のすべて、奉公人のなかの4名になっており、全体としては、ピューリタンでない人のほうが多いことが注目されてきます。通常、彼らはピューリタンたちであったから、信仰を同じくする同質的集団だから、メイフラワー・コンパクトを結んだ、と思われてきています。後で申し上げるように、分離派ピューリタンとして教会契約という思想的、実践的背景があればこそ、契約という形がとられたことは確かです。しかし、この1620年11月11日という時点で、上陸直前に、いわば急遽、よそ者を含めて、否、よそ者の署名のほうが多数という形で契約が結ばれたのは、これらのよそ者を集団内に確保しておく必要があったからと解すべきでしょう。すなわち、信仰を別にする人たちがいたから、異質的なものがいたから、契約を結んで一つの政治社会を形成する必要があったと解釈されるべきでしょう。この点を、もう少し考えてみたいと思います。

VI 契約：教会契約と政治契約、同質と異質、純粹と妥協、排他と内包
 考えてみますと、いわゆる社会契約論、ロックとカルソーとかが登場してくるのは、もっと後のことです。また、彼ら分離派ピューリタンの人たちは素朴な農民であり、法律に詳しいとは言えない。ただ、ブルースターは法律的なことに通じており、またグループの中では年長でしたから、この文案はおそらく彼が書いたと思われます。しかし、あらかじめイギリスで準備したとか、航海中に相談して書いたというものではない。先にのべたように、上陸直前に、よそ者の間で不穏の言動がみられ、いわばそれへの対策として、急遽、緊急避難的に作られたとあってよい。したがって、ごく短いものです。では、なぜ彼らはそういう文書、契約という文書を思い付き、作成しえたのか。その点、多くの人が指摘しており、私も同感なのですが、いわばモデルとして church covenant、教会契約という経験を彼らは持っていた。すなわち、イギリス国教会から分離し、別に彼ら自身

のコングリゲーションを、教会を、契約によって作った。相互に契約し、神と契約し、新しい教会を形成し、自分たちが牧師を選び招き、長老を選任した。そういう意味で、契約によって教会組織を作ることを経験しているわけです。この契約で作る、という考え方の背景には、いうまでもなく古代イスラエルの契約論、⁶⁾あるいはキリスト教の契約思想の流れがあることは言うまでもありません。したがって、そこに契約についての思想的伝統と具体的な経験とがあったわけです。そこで、そうした教会契約に倣って、植民地形成の政治契約を結んだ、といえます。

そのことを前提にしたうえで、私がここで強調したいのは、教会契約、church covenant と政治契約、当時 plantation covenant と呼んでいましたが、とは非常に違い、ということです。教会契約というのは、信仰を同じくする者、同質集団が作るものです。信仰を同じくしない者は、その契約の当事者にはなりえないわけです。むしろそういう人たちは排除されなければならない。その契約に参加するためには、たいへんな信仰告白をしなければならない。当時広くピューリタンにおける信仰告白は大変厳格なものです。いかに改心、conversion の体験があったか、神と会衆のまえで告白しなくてはならない。真の信者のみが会員である、純粋な、同質的な教会であろうとする故、不信心な者、異質的なものは排除されなければならない。それは、墮落したローマ教会、イギリス国教会を批判し、否定したピューリタンの教会のあり方としては当然といえましょう。そこで、彼らが政治社会を形成するときも、同じ様に純粋で、同質的で、一元的な社会であることを望んだとしてもうなずけます。ことに、彼らがあらゆる点で指針とした旧約に描かれたイスラエルはまさにそうした同質的、一元的な社会であった。そこでは、いわば教会契約と政治契約とが全く重なりあっていた、といえるかと思います。おそらく、ライデンで考えた彼らの植民地のあり方は、それに近いものであったでしょう。最初にちょっと名前をだしたウィンスロップのマサチューセッツ植民地形成は、今日はふれませんが、そうしたあり方を目指して試みられたものであります。⁶⁾しかし、

わがプリマス植民地の場合は、少し、否、やや誇張していえば、基本的に違います。

上の人員構成のところで強調したように、いわゆるピルグリム・ファーザーズは、その質的中核はピューリタン、聖徒ですが、量的にはピューリタンでない人びと、よそ者がその半数あまりを占めている。しかも、企業としての植民地設立、経営の主たる出資者はロンドンにいる投資家、商人であり、しばしば聖徒たちの心理、思惑を無視して、資本の論理、利潤の追及で判断する。そうした背景のもとで、よそ者の離反、別行動の動きがみえてくる。そのとき、聖徒たちは、信仰上では異質的存在であるよそ者を集団内にとどめ、協力して荒野に新しい社会を形成すべく急遽政治契約を結んだしだいです。すなわち、メイフラワー誓約は、教会契約をモデルにしたにせよ、教会契約ではなく、政治契約であり、異質の存在を前提にし、それを内包化することを目的とするものであった、といえましょう。政治契約は、教会契約と異なり、本来異質なるものをいかに統合していくかという必要の論理に基づくものであり、本来多元化、妥協、曖昧さを認めざるをえない性格のもといえましょう。メイフラワー誓約は、「神と各自相互の前で」「厳粛に」に契約したのですが、神との契約ではありません。あくまで、相互の間の契約であり、権力創出の契約であります。権力などというと、皆さんは違和感を覚えるかと思いますが、権力とは簡単に言えば集団の意思決定であり、その決定を集団構成員が守るようにする、つまり守らない者がいれば強制力を使って罰する、まあそうした仕組みと言ってよいでしょう。ここで、契約によって、“a civil Body Politick”を形成したということは、そうした権力を創出したということです。ただ、極めて重要なことは、その権力の正統性を何に基づかせているか、という点です。聖徒たちも、イギリス国王の権威は別に否定していませんが、彼らの権力の正統性を国王の権威に求めることはしません、というよりは出来ませんでした。また、彼らの中には、全員が承服し服従していくようなカリスマ性をもった指導者もいませんでした。彼らは、権力の

根拠を彼ら自身、聖徒もよそ者を含めての彼らの間での同意、¹¹⁰ 約束、契約に求めたのです。そこでは、41名の署名者は、権力の主体であり、また権力の客体となることを約束したのです。まさしく、自治、自己統治、セルフ・ガヴァメントの現実が素朴ながらそこに生まれた、といえましょう。

Ⅶ 比較：なぜ、1607年のジェームズタウンではないのか

ここで少し話しを変えますが、アメリカ史を勉強した方は、「プリマスからアメリカ社会が始まったみたいなのをいうが、お前は、先学期には1607年のジェームズタウンの建設がイギリス人によるアメリカ史の始まりだといっていたではないか」といわれるかと思います。さっきヴァージニア会社について申しましたが、今日のワシントン市の南にジェームズタウンという植民地を1607年に設立し、それが、確かにアメリカ大陸におけるイギリス人の最初の恒久的植民地です。¹¹¹ なぜ、このジェームズタウンを史的原点としてとり上げないのか。実は、この1607年のジェームズタウンにおける植民地建設は、しばらくの間うまくいかない、失敗なのです。ある論文は“fiasco”「失敗」と呼んでいます。大変大勢の人が死にます。確かにプリマスも、1620-21年にかけての冬の間約半分が死にます。2カ月あまり小さな船に押し込まれて、栄養失調あるいは壊血病などになっていたためと思われます。しかし、プリマスの場合にはその後は、死亡がずっと減ります。それにたいして、ジェームズタウンの場合は、当初半分以上死ぬのみならず、後から移住者を補給するのですが、次から次へ死んでしまふ。先住民インディアンとの関係を別にしても死ぬ。ヴァージニアは、ヴァージニア会社という大企業が国王から特許状を受け、資金と組織とをもって作った植民地なのに、うまくいかなかった。なぜか。最近読んだ論文に“Apathy and Death in Early Jamestown”という興味深い論文がありました。¹¹² apathy とは、無関心とか無気力、要するにやる気がない。会社がいくら人員、物資を補給しても、結局皆やる気がない。そこで、働かざるもの食うべからず、といって軍隊組織をつくったりするが、やはりうま

くいかない。結局、肉体的にも精神的にも栄養失調になって死んでしまう。では、何故やる気がないのか。明確な答えはないようですが、私なりに一つの解釈をすると、ジェイムズタウンは、国王の権威と、大会社の組織と資金とで着手されたが、アメリカ大陸の新しい荒野で、移住した人びとの中に、そこを自らの生涯の地として、主体的に参加する意識が生まれるような組織がなかったのではないか。さらに、元来ジェイムズタウンは奪略による大儲けのための軍事基地的性格をもち、そこには地道に農耕をして食糧を生産する気分、「心の習慣」がない。ただ、やがて年とともに移住者が増加し、人口が拡散するにつれ、植民地の経営の為に、そういう人たちの代表者を集め、討議をして、彼らの合意を得て決定するという過程をとらざるを得なくなる。植民地内で間接的にせよ決定に参加させることを1619年からやりだします。それが、アメリカ最初の議会と言われるヴァージニア植民地議会ですが、これが実際に軌道に乗るのはもう少しあとのことです。それも、代表制という間接的参加です。もうその頃の1620年には、「ピルグリム・ファーザーズ」がプリマスに上陸しています。ヴァージニア植民地が軌道にのるのは、1630年代以降本国向け輸出用タバコの栽培、そのための労働力としての黒人奴隷、そして植民地統治の同意調達機関としての植民地議会の確立以後のことと言えます。ヴァージニアは、18世紀後半独立にさいしすぐれた指導者を輩出し、「すべての権力は人民に帰属し、また当然に人民に由来する」ことを公的に明言したのは、まず『ヴァージニア権利の章典』でした。しかし、プリマスの人びとは、その150年以上前に、そのことを身をもって感じ、それを実践していたと言えましょか。

Ⅷ 構造：政治参加・政教分離・政軍関係

時間がなくなってまいりましたので、以下要点だけ申し上げます。構造、つまり constitution のことです。メイフラワー誓約は、原始契約であり、権力創出はいたしました、きわめて短い、緊急避難的につくられたものであり、具体的に権力構造については記しておりません。集団の政策

決定の仕組み、過程については記しておりません。したがって、それ自体をいわゆる成文憲法と呼ぶことはできないと思いますが、その極めて素朴な形での原型とみなすことはできるかと思えます。まず政策決定の基本は、ブラッドフォードの『手記』によりまして、「時の許す限り、会合し、民政および軍政のために、法と秩序とにつき相談した」とあり、全員参加が前提とされていたようです。これが、植民地総会 (general meeting) と呼ばれるものの原型です。そして、総督および彼を助ける参議 (governor, assistant. その規模から言えば村長と助役と呼んだほうが、現実に近いとは思いますが) を一年ごとに選出しています。最初は年長で人徳あるカーヴェー (John Carver) が選ばれ、翌年彼の死後ブラッドフォードが、長年にわたって選ばれる。同じ人間が選ばれている点、権威主義的とも言えますが、重要なことは、毎年選挙が行われて、選び直されていることです。なお、植民地が拡大し、人口が拡散するにつれ、徒歩しか交通手段のない当時では、全員参加は事実上困難になり、各タウンより議員を選ぶ代表制に代ります。これも、直接参加をさせないというよりは、事実上参加できないという現実の必要によるものといえましょう。未だピューリタン革命以前のことであり、理論として、またモデルとして、彼らが民主主義を知っていたわけではありませんが、自発的集団としての教会形成およびその運営の経験と、荒野での生存の必要性とに基づく、まあ民主政治の実践と見なすことが出来るかと思えます。

また、プリマスはごく小さな植民地でしたが、そこでは教会・政治・軍事の分野が一応区別されていたことも注目されます。ブラッドフォードは総督として、政治、民政 (civil government) を担当しますが、教会の運営については、長老のブルースターが責任をもちます。そして、ブルースターは、このグループでは一番教育もあり、法律の知識もありますが、総督のような政治上の地位にはつきませんで、専ら教会の管理の責任者として終始します。元来彼ら、聖徒たちの牧師であったロビンソンはライデンに残りましたので、プリマスの教会は無牧たらざる得ませんでした。そこ

で、ブルースターが説教もいたしました。ただし、念のため申しあげますけれども、セパラティスツは決して無教会主義、無牧師主義ではございません。牧師がおります。洗礼などの聖礼典も行われます。ただし、この時にはたまたま牧師がいなかったのです。一般的に言って、ヨーロッパの教会に比べるとアメリカの教会では、古屋先生のように神学博士のタイトルを持った牧師などまれで、牧師の資格をもたない人、レイマン（平信徒）もよく説教をします。レイマン・プリーチャーが多い。プリマスの場合には、イギリスから送られてくる牧師は国教会の牧師であったりしてうまくいきません。そこで、レイマンのブルースターが説教し、後によろやく、お隣のマサチューセッツからハーヴァード大学出の若い牧師が招かれ、長続きます。しかし、拡散した人びとの新しい教会では、牧師を招く余裕などなく、レイマンが説教する、否せざるをえない。そういう意味では、このプリマス植民地における教会のあり方は、アメリカにおける後の西部などにあるレイマンが説教する教会、会衆の原型と言えるかもしれません。

つぎに軍事については、マイルズ・スタンディッシュ (Miles Standish) という人が責任者になります。彼は、イギリスで参加したよそ者で、ピューリタンではありませんが、ヨーロッパ大陸での軍事経験があり、プリマスにとって不可欠の人物となり、非常に信用された人です。「ピルグリムズ」の集団は、意外に響くかもしれませんが武装集団でもあります。イギリスを出発するときから先住民であるインディアンの存在を十分に意識し、兵器なども小さな大砲を含め準備して来ます。男子は、いわば皆が武装します。スタンディッシュは正式に隊長 (captain) に選出され、民兵制度が作られます。⁽¹³⁾ 植民地時代のアメリカのごとく労働力の不足しているところでは、正規の軍隊、職業軍人などという、生産に従事しない、破壊を事とする集団を置いておく余裕はありません。といって、それでは軍事力は必要が無いかといえば、十分ありうる。したがって、普通の市民が時によって兵士になる、いわゆるミリシャ (militia) 制度、有事が終わり、平時が戻れば、生産に戻る、という民兵制度を採ることになります。この

軍事の在り方でも、プリマスはアメリカ社会の史的原点といえそうです。

Ⅸ 排除：先住民排除による土地獲得、「アメリカ史の原罪」

次は、私が、最近重視しているテーマですが、時間もなく、ごく要点だけ申しあげます。プリマスは、よそ者、ヨーロッパからの移住者は原則として排除しなかったが、先住民であるインディアンは結局排除し、その土地を獲得した、ということについてです。⁴⁴⁾ プリマスにも、当然のことながら以前には、先住民がいたわけですから。上陸した地点のインディアンは、ヨーロッパからの漁夫などとすでに接触があり、いわば文化汚染により死滅していたにせよ、近隣にはインディアンがおりました。「ピルグリムズ」は、移住したばかりで、どうやって食べていってよいのか分からない。幸いにして友好的なインディアンがいたので、インディアンの生活の知恵に依存します。たとえば、トウモロコシの植え方、魚を肥料として使う方法。魚をどうやって捕まえるのか。毛皮をどうやって採るか。営利企業、私的企業として、本国の出資者は、何か金になるものを「早く送ってこい」という。別に黄金があるわけではないし、ヴァージニアのようにタバコができるわけでもない。何を送ったらいいのかというと、それは毛皮です。川にいますビーヴァーですか、ああいうものです。ところが、イギリスの農民はビーヴァーなど見たこともないし、採り方もわからない。インディアンと交換して手にいれなければならない。その他、非常にインディアンに依存します。したがって、インディアンと友好的でなくてはならない。よく絵にも描かれるあの感謝祭の時に、インディアンが大勢招待されました。神に感謝すると同時に、おそらくインディアンに感謝したであろうと思えます。ただ、彼ら「ピルグリムズ」は農耕移住民で土地が欲しい。しかも、今日はお話いたしませんでしたが、マサチューセッツの方に1630年から、大勢のセパラティストではないピューリタンが移ってまいります。これは大挙してです。そうすると、彼らも農耕民ですから、土地が必要になってくる。そこで、結局土地をめぐる、インディアンと衝突が起る。結論的に

いいますと、形は条約、買収、略奪、何であれ、イギリスからの移住民は結局インディアンから土地を奪取してしまふ。ピューリタン移住者の間に「約束の地カナン」というイメージがよくでてまいります。これは、プリマス側より、主にボストンの方のピューリタンに多い。旧約聖書を読むと、「約束の地カナン」は無主の地、無人の地では決してない。先住民がいるわけです。「ヨシュア記」を読むと、それを武力で排除し、占領し、支配し、「約束の地」の主になる（今日のパレスティナ問題の史的原点!?!）。アメリカ大陸における、いわゆるアメリカ史の展開は、こうしたヨーロッパからの移住者による先住民排除による土地獲得の歴史という側面をもっております。それは、しばしば先住民犠牲の戦闘を伴います。ニューイングランド地方でも、プリマス植民地も参加するピークォット族一掃のピークォット戦争（1636-37）を初め、いくつかの対インディアン戦争が行われております。これは、「アメリカ史の原罪」ともいうべきものであり、「ピルグリムズ」も、たとえばヴァージニア、マサチューセッツなどに比べれば先住民に対して慎重であり、友好的ではありましたが、少なくとも結果的にはこの「原罪」と無縁ではありません。

X おわりに

終りにしなければなりません。今まで申しあげてきたことの中には、お分り頂けたと思いますが、プリマスに来た人びとは、同質的な集団ではなく、分離派ピューリタン＝聖徒が中核であるにせよ、多くのよそ者を含んでいた。そうした異質的な人びと、相互に見知らぬ者どうしだから契約を結んで、一つの政治社会を形成する必要があった、ということです。そういう意味で、移民社会あるいは多元的社会としてのアメリカ社会の一つの史的原点のようなものが、ここに認められるのではないか。アメリカ社会は、本来知らない者どうし、ストレンジャーズどうしの集まりです。そういうストレンジャーズどうしを繋いでいくものが契約であり、一人一人が、その契約の主體的な当事者なのです。当時の人はもちろん「憲法定

権力者」,「主権者」などという言葉を知りはしないし、そんなイメージはなかったと思いますが、メイフラワー・コンパクトに署名した41名の人たちは、神の前で厳かに署名しているわけです。これは大変主体的な責任のある行為なんですね。そうした主体的な行為で、みずから権力を形成して結ばれ、その決定に服従することを誓う。

では、すべての要素が機械的に多元的なのか。異質的な者がただ機械的に結ばればよいのか。私自身はそこに、やはりコア、価値的な中核があるし、またなければならぬと思います。そうでなければ、社会は解体し崩壊してしまふ。そこで、価値的に、最初に定住した人 (settlers) があり、それに対して後からいわゆる移民 (immigrants) が加わるということになる。しかし、すべてが中核に同質化する、あるいは中核が後から、外から来たものを同質化させてしまふ、というのが理想なのではなく、後から、外から入ってきたものの考え方をある程度認め、中核自体が変化してゆかなければならぬ。異質を内包化させるためには、同質もある程度変質しなければならぬ。そうでなければ、社会は硬直し、枯死してしまふ。そういう意味で、アメリカ社会には同質と異質との間の緊張関係がずっとあり、そこに危機と共に活性化がある。その史的原点が、1620年の聖徒とよそ者によるプリマス植民地形成ではないでしょうか。

最後の最後です。昨日、源先生の最終講義をお聞きしました。横井小楠をめぐって、源先生らしく非常に誠実に、丹念に行われた示唆に富むお話でございました。その中で源先生が、理論知と実践知について触れられました。実践知というのは、生活に基づく知恵といえましょう。私はまさに、このメイフラワー・コンパクトは、実践知の最たるものであると思います。なにも、社会契約理論があって、それを勉強したから、それで原始契約を結んでいきましょ、というのではない。⁴⁵⁾ 現実の緊急事態に直面して、それをどうやって解決していくか、という時の知恵なのです。もちろん、その時のモデルとしては、教会契約 (church covenant) があったわけですが、それはモデルであり、彼らが結んだのは本質的には政治契約で

した。現実の必要のなかから、知恵が働いた、とってよいと思います。

「知恵」を「思想」と言い換えてもよい。われわれは、「思想」というと、たとえばホブズといった偉い「思想家」の思想が思想であって、われわれ普通の人間には無関係と思いがちです。しかし、アメリカの思想史はそうではありません。アメリカには「思想家」はいない。いない、という誤解されますが、いわば書斎人的な狭義の思想家的思想家はいない。実際の政治生活をやって忙しい人、ジェファソンもそうです、この時のブラッドフォードとかブルースターもそうです。その忙しい日常生活の中から、またその日常生活の必要から、契約という知恵、思想をうみだした。普通の人が思想を持つ、生活の中から思想が生まれるという、アメリカの思想のあり方の特色の史的原点をここに見出だすことができるような気がいたします。終りのほうは急ぎましたが、これで終りたいと思います。

十年の長きにわたり、大変お世話になり、ありがとうございました。

注

本稿は、1991年2月26日、国際基督教大学におけるいわゆる最終講義の録音テープを起こしたものに削除、加筆などの手を加え整理したものである。当日の冗談など一切省いたが、話し言葉調は残した。あくまで「講義」であり、それも、フレッシュマンにも理解してもらいたいと願って、周知のことも含めてできるだけ平易に話した。もとより、学会や研究会での「研究報告」ではなく、その点『社会科学ジャーナル』に載せることに躊躇を覚えるが、ICUに10年楽しく勤めさせていただいた記念として敢えて載せていただいたしだいである。本稿のテープ起こし、ワープロ入力作業については、本大学大学院生、片桐康弘さんに、印刷への配慮などについては、渡辺英人さんに、大変お世話になったことを感謝をもって記したい。なお、本稿の作成にあたってはICUにおける若き同僚、千葉真、大西直樹両教授に直接間接お世話になった。若い同僚をもち、教えてもらうことは、老人の特権かなと、深く感謝するものである。なお、本稿は「講義」であるゆえ、注は直接関係するものにとどめた。実は、本稿とはほぼ同じテーマをとりあげ、拙稿「原型としてのプリマス植民地の形成——同質と異質との統合」、『国家学会百年記念—国家と市民』有斐閣、第二巻、1987年、pp.1-35として少しく「論文」風に論じたことがあるが、そこには引用、引照、参照した文献を注記してある。

(1) David S. Lovejoy, "Plain Englishmen at Plymouth," *New England Quarterly*, 63

- (June, 1990), p.232.
- (2) William Bradford, *Of Plymouth Plantation, 1620-1647*, ed. Samuel E. Morison, New York: Alfred A. Knopf, 1952, 1984. 以下、引照ないし引用のさいには、『手記』とし、とくに真は記さない。
- (3) John Winthrop, "A Model of Christian Charity (1630)," in Edmund S. Morgan, ed., *Puritan Political Ideas, 1558-1794*, Indianapolis/New York: The Bobbs-Merrill Co., Inc., 1965, pp.75-93.
- (4) Cotton Mather, *Magnaria Christi Americana*, London, 1702, Harvard U. P., 1979.
- (5) このオランダからさらにアメリカへの移住の理由については、後に『手記』などを利用しつつ、半ばプリマス植民地の公的歴史を書いたモートンの著書に詳しい。Nathaniel Morton, *New England's Memorial* (Cambridge, 1669), in John Mansfield, ed., *Cronicles of the Pilgrim Fathers*, Everyman's Library, 1910, pp.1-244. モートンは、ブラッドフォードの甥で、後にプリマス植民地の書記に任命され、記録係りになる。
- (6) Eugene A. Stratton, *Plymouth Colony: Its History & People, 1620-1691*, Salt Lake City: Ancestry Inc., 1986, p.31.
- (7) The Mayflower Compact, Nov. 11, 1620.

In the Name of God, Amen. We, whose names are under-written, the Loyal Subjects of our dread Sovereign Lord King James, by the Grace of God, of Great Britaln, France, and Ireland, King Defender of the Faith, &c Having undertaken for the Glory of God, and Advancement of the Christian Falth, and the honor of our King and Country, a voyage to plant the first colony in the northern Parts of Virginia; Do by these Presents, solemnly and mutually, in the presence of God and one another, covenant and combine ourselves together into a civil Body Politick, for our better Ordering and Preservation, and Furtherance of the ends aforesaid: And by Virtue hereof do enact, constitute, and frame, such just and equal Laws, Ordinances, Acts, Constitutions, and Officers, from time to time, as shall be thought most meet and convenient for the general Good of the Colony; unto which we promise all due Submission and Obedience. IN WITNESS whereof we have hereunto subscribed our names at Cape-Cod the eleventh of November, in the Reign of our Sovereign Lord King James, of England, France, and Ireland, the eighteenth, and of Scotland, the fifty-fourth, Anno Domini, 1620.

- (8) 並木浩一『古代イスラエルとその周辺』新地書房、東京、1979年、5「古代イスラエルにおける契約思想」参照。
- (9) しばしば、メイフラワー誓約よりも、ウィンスロップの船上の説教、「丘の上の町」の建設を訴える説教の方が、アメリカ社会の史的原点とされる。その鮮明な目的意識、使命感、選民思想が、アメリカ社会のイデオロギーとして理解されやすい故もあろう。しかし、ウィンスロップは教会契約と政治契約とを一つにして捉え、神との契約によって一元的社会の建設を、まさに新しきイエルサレムの建設を目指す。ちな

みに、彼が引照する契約とは、イギリスのケンブリッジで結んだ契約 (The Agreement at Cambridge, August 26, 1629) であるが、それは12名の「役員」の間での契約であり、移住者「全員」の間での契約ではない。いわば少数のエリートの間だけの契約である。そうした一元化、同質化志向の契約、社会形成は、(神との契約による社会形成という真摯ではあるが傲慢な発想は別としても)、元来多元的社会たらざるを得ないアメリカ社会においては、異質の排除による自己硬直か、異質の浸蝕による自己解体か、により破られざるを得ない。恐らく、アメリカ社会はこの一元化か多元化か、理念型としてのウィンスロップ型かブラッドフォード型かの緊張のもとに歴史を形成してきたといえよう。ちなみに、プリマス植民地自体は王政復活、名誉革命の後、1691年(丁度300年前になる)の特許状によりマサチューセッツ植民地に併合される。したがって、独立に際してもプリマス・ステイトなどはできなかった。それだけに、プリマスはますます物語、神話の対象となる。なお、プリマスとマサチューセッツとの対比を、上記拙論でも少しく試みた。

- (10) プリマス植民地設立について、同時代的に最も早く刊行された書物としては、*Mourt's Relations* と呼ばれる1622年、ロンドン刊行のパンフレットがある。筆者ないし編者は、主にクッシュマン (Robert Cushman)。彼は、ライデン教会の執事 (deacon) でイギリスへ先発して、移住をめぐる財政的側面を担当した。メイフラワー号には乗らず、イギリスで出資者と交渉し続け、1621年第二船のフォーチュン号でプリマスに渡り、許可状や出資者との契約書を持参した。同年12月、フォーチュン号でイギリスに帰るが、その際、主としてウインズロウ (Edward Winslow 後に総督も勤めるが、ブラッドフォードの有力な片腕であった) が、一部ブラッドフォードが書いた草稿を持ち帰り、イギリスで G. モートなる人物の手を通じ刊行したものらしい。序文に G. Mourt という署名があるので、*Mourt's Relations* と呼ばれるようになった。そこには、「停泊することになった前日のこと、一つになり、協力しあうことをよしとせず、別派の動きをする者がいることが認められたので、われわれが一つの団体に結合し、皆の同意をもって (by common consent)、その形成に、その選出に同意する政府、総督などに服従することが、望ましいと思われ、下記の文書に署名した」とあり、メイフラワー誓約書の全文がのせてある。*Mourt's Relations, A Journal of the Pilgrims at Plymouth*, edited with an introduction by Dwight B. Heath, Cambridge/Boston, Applewood Brothers, 1986, p.17. それが、ヨーロッパに知られた最初のメイフラワー誓約の文書、およびそれについての記述であろう。ちなみに、誓約書それ自体は残っていない。なお、本誌の千葉論文でも指摘されるように、ハンナ・アレントは、同意と契約、約束とを区別し、支配者の統治に被支配者が同意するという垂直的関係(統治契約)について「同意, consent」を使用し、相互の契約という水平関係(政治契約)について「約束, mutual promise」を使用する (Hanna Arendt, *On Revolution*, 1963, Penguin Books, 1987, p.177)。そのほうが、理論的に明快であろうが、上の文章の示すごとく、当時の人びとは、相互の契約に同意 (consent, agreement) という言葉を使用していた。用語法はどうかであれ、相互の、水平型の契約によって、政治社会を形成し、その正統性を相互の約束、相互の同意に

おいたことこそ問題の核心なのである (Arendt, pp.167-68)。

- (10) 日本にも招かれたことがあり、植民地時代史の精力的な研究者であるグリーン教授は、アメリカ史研究において南部史が特殊扱いされ、ニューイングランドの影響が過大視されているとして、挑戦的な示唆に富む著書を刊行した。Jack P. Greene, *Pursuits of Happiness: The Social Development of Early Modern British Colonies and the Formation of American Culture*, U. of North Carolina P., 1988. しかし、そこでも初期のジェームズタウンは、植民地を「アメリカにおけるスペインの経験で考える」一攫千金を夢見る人びとの基地であったこと、それに失敗し、通商基地としても成功しなかったことを指摘し、当初から農耕植民地であったと見なすのは誤解であるとしている (pp.8-10)。そして、「植民地にたいする長期的な帰属感をもつものが少なく、宗教その他の伝統的の制度が脆弱であり、コミュニティ意識が稀薄であり、文化的慰安がほとんど存在しなかった (p.12)」とある。それに対して、プリマスは、家族単位の移住で人口の再生産が順調に行われ、タバコのような巨富をもたらすことはなかったが、農耕と毛皮でともかく安定した生活を営むことができたことが指摘されている (pp.18-20)。なお、ジェームズタウンについては Edmund S. Morgan, *American Slavery, American Freedom: The Ordeal of Colonial Virginia*, New York/London: W. W. Norton & Company, 1975; Jon Kukla, *Political Institutions in Virginia, 1616-1660*, New York/London: Garland Publishing, Inc., 1989, 参照。
- (12) Karen O. Kupperman, "Apathy and Death in Early Jamestown," *Journal of American History*, 66 (June, 1979).
- (13) 民兵制度については、拙稿「民兵制度と革命戦争 — アメリカ独立戦争をめぐる」(1), 『国家学会雑誌』(東京大学法学部) 104巻3・4号 (1991年3月)において、プリマスの場合にもふれて論じ、プリマスの民兵関係の文献を参照している。
- (14) この先住民排除については、上記拙著の第2章「排除による土地空間の獲得—アメリカ史の原罪」において論じている。その排除は人種主義 (racism) による差別というより、より根本的な排除である。たまたま読んだものではあるが、オーストラリアにおける先住民とヨーロッパよりの移住者との関係を論じ、従来の単純な人種主義解釈をしりぞけ、歴史的な文脈、社会的構造のなかでとらえようとする、Gaynor Macdonald, "Racism and Australian Aboriginal People: A Historical Paradigm Gone Astray," 『社会科学ジャーナル』29号(1), 1990年は、比較史として示唆的である。
- (15) メイフラワー誓約は「確かに社会契約であるが、社会契約理論のべたものではない」(Michael Lessnoff, *Social Contract*, Atlantic Highlands, N. J.: Humanities Press International, Inc., 1986, p.42. 下線, 原著では斜体, 原著者), というのは正しい。まさしく、理論ではなく、知恵に基づく現実であった。なお, contract, compact, covenant といった用語法については, Donald S. Lutz, *The Origins of American Constitutionalism*, Louisiana State U. P., 1988, p.17 を参照。